短 報

乳腺原発 Signet-ring cell mucinous carcinoma の 1 例

東邦大学大森病院病理

小林 照明 三宅 洋子 前田 陽子 柳田 真岐
三浦 妙太

I. はじめに

乳腺粘液癌の一部に印環細胞型癌細胞が観察されることはあるが、印環細胞型癌細胞が腫瘍の大半を占める印環細胞癌はまれで、1941 年 Saphir¹⁾ が粘液癌の一亜型で、Signet-ring cell mucinous carcinoma としている。今回、われわれは、Signet-ring cell mucinous carcinoma に相当する 1 例を経験したので、その穿刺吸引細胞所見を中心に報告する。

II. 症 例

患者: 56 歳, 女性

既往歴: 特記すべきことなし

現病歴: 右乳房の腫瘤に気づくも放置, 増加傾向がみられたため当病院を受診する。右乳房 C 領域に 6.5 cm 大の境界不明瞭な腫瘤を触知した。穿刺吸引細胞診が行われ, その結果悪性腫瘍を疑った。消化器など他の組織に腫瘍を認めず, 当外科に定型的乳癌根治が行われた。郭清した腋窩リンパ節に転移がみられた。

穿刺吸引細胞所見: 多量の粘液様物質を背景に, 腫瘍の多くは 15~25 個の軽度重積する細胞集塊にて多数出現し, 一部に孤立散在性でもみられた。細胞個々は, 20~40 μ m 大で N/C は比較的低く, 1~2 個有す

Signet-ring cell mucinous carcinoma of the breast
Teruaki KOBAYASHI, C.T., I.A.C., Yoko MIYAKE, C.T.,
I.A.C., Yoko MAEDA, C.T., I.A.C., Maki YANAGIDA, M.D.,
Myota MIURA, M.D.

Department of Pathology, Omori Hospital Toho University
論文印刷請求先 ☎ 143 東京都大田区大森西 6 の 11 の 1 東
邦大学大森病院病理 小林照明

平成 8 年 5 月 7 日受付

平成 8 年 9 月 6 日受理

る核は, 類円形~不正形で偏在性に位置し, クロマチンは粗顆粒状に増量していた。細胞質は泡沫状で淡く橙緑色~淡桃色を呈した (写真 1 a, b), PAS 反応で背景の粘液様物質と細胞質全体が陽性であった (写真 1 c)。

肉眼所見: 腫瘍の大きさは 6.9 cm×6.0 cm で, 境界不明瞭, 断面は半透明で光沢がみられ, 平滑であった。

組織所見: 豊富な粘液中に大部分が泡沫状細胞質の印環細胞からなる癌細胞巣が浮遊し (写真 2 a), 脂肪組織への浸潤もみられた。PAS 反応 (写真 2 b) とアルシアン青染色 (pH 2.5) で間質と印環細胞質内の粘液に陽性を示した。

写真 1 穿刺吸引細胞像。a, b: 軽度重積する細胞集塊で核は偏在傾向を示し細胞質は淡い (Pap. 染色, 対物 a: $\times 40$, b: $\times 100$), c: PAS 反応で背景の粘液様物質と細胞質全体が陽性を示す (PAS 反応, 対物 $\times 40$)

写真 2 組織像、a：豊富な粘液中に泡沫状細胞質の印環細胞癌巣が浮遊する（H-E 染色，対物×20），b：PAS 反応で間質と印環細胞質内に陽性を示す（PAS 反応，対物×40）

III. 考 察

乳腺粘液癌は上皮細胞から細胞外への粘液産生を特徴とする特殊型の浸潤性乳癌で、腫瘍全体が粘液様の癌巣で占められるものである。本例も多量の粘液中に印環細胞巣が浮遊し、乳癌取扱規約²⁾では粘液癌に分類されと考えられる。Saphir¹⁾は腫瘍の大部分を印環細胞型癌細胞が占める粘液癌を Signet-ring cell mucinous carcinoma として報告しているが、当時は細胞診はまだ一般化しておらず細胞像の記載はない。

南雲³⁾らは粘液癌の細胞像で、不規則重積配列を示

す細胞集塊の一部に印環細胞がしばしば出現し、そして背景に豊富な粘液様物質がみられることを述べている。本例は印環細胞の細胞集塊が主体をなすが、豊富な粘液様物質を背景に認める点では一致している。一方、本例の細胞個々の核および細胞質所見は印環細胞の様相を示す硬癌由来⁴⁾、小葉癌由来⁵⁾の印環細胞癌にきわめて類似するが、背景の粘液様物質と細胞相互の結合性に注目することで鑑別が可能であると考えられた。

ところで、本穿刺吸引細胞標本での印環細胞型癌細胞は、重積する細胞集塊にて出現するために、組織標本に比べて印環状が不明瞭である。しかし、細胞質は泡沫状で淡く類似し、この点に注目すれば組織型の推定は可能であると考えられた。

粘液癌は一般に発育が緩徐でリンパ節転移が少なく比較的予後良好とされているが、Saphir によれば局所再発や転移がみられる症例は予後不良で本例の予後も不良と考えられる¹⁾。細胞像では、印環細胞型癌細胞の多少が粘液癌と鑑別点となり、予後を推定するうえで穿刺吸引細胞診での診断は意義のあるものと思われた。

文 献

- 1) Saphir, O. Mucinous carcinoma of the breast, Surg. Gynecol. & Obstet. 1941; 72: 908~914.
- 2) 乳癌研究編：臨床・病理乳癌取り扱い規約，第11版．東京：金原出版 1992：20.
- 3) 南雲サチ子，松田 実．乳癌粘液癌の細胞診．日臨細胞誌 1987；17：59~63.
- 4) 石原明徳，上森 昭，木村多美子，脇田純子，野村ひとみ，小山英之・ほか．乳腺原発印環細胞癌の1例．日臨細胞誌 1986；25：764~769.
- 5) 畠山重春，川名展弘，黒田清一，大久保修二，近藤近江，渡辺宏志・ほか．乳腺原発印環細胞癌の1例．日臨細胞誌 1995；34：680~686.